

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 4 月 5 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22320120

研究課題名（和文）近代エキゾティシズムの総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive Research on Exoticism

研究代表者

東田 雅博（TOHDA MASAHIRO）

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：50155496

研究成果の概要（和文）：エキゾティシズムという古来より、また洋の東西を問わず見られた現象を、西洋史、東洋史、日本史、英米文学、中国文学を専門とする研究者によって総合的に研究した。その際特に、オリエンタリズムや帝国主義に回収されないエキゾティシズムの力に的を絞り、その力のある程度具体的に明らかにしえた。中国庭園を愛で、東洋の陶磁器を愛好したヨーロッパの人々がそれによって影響を受け、いつしかモダニティへと導かれたといった事例がそうである。また、これに関連してシノワズリーとジャポニスムを比較したとき、通説とは逆にシノワズリーの方が西洋により根本的影響を与えた可能性があることも示唆しえた。

研究成果の概要（英文）：Exoticism is not confined to the West. Nor to modern age. We studied this elusive exoticism comprehensively. In doing so, we concentrated our efforts to the influence of exoticism which can't be reduced to Orientalism, or imperialism, and presented its concrete image. For example, European people, who loved Chinese garden and porcelain, were introduced to modernity, before they knew what was happening exactly. In relation to this point, we suggested that against commonly accepted theory, Chinoiserie rather than Japonisme might be revolutionary power to the West.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2011年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
2012年度	2,700,000	810,000	3,510,000
年度			
年度			
総計	11,300,000	3,390,000	14,690,000

研究分野：異文化交流史

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：エキゾティシズム、オリエンタリズム、帝国主義、オクシデンタリズム、異文化理解

1. 研究開始当初の背景

21世紀の今日、エキゾティシズムへの関心

は、ポストコロニアリズムの衣をまとっていても、例えば以下の舞台、*Bombay Dreams*,2001;*The Far Pavilions*,2005,に見られるようになおも根強くある。しかし、その原型となった近代のエキゾティシズムの研究は、総花的なシンポジウム（2008 French Decorative Arts Symposium:Exoticism in French Decorative Art）などを別にすれば、主に帝国主義の観点からオリエンタリズムと安易に同一視されてきたため、その研究はなお不十分なままであった。

エキゾティシズム研究は、従来、18世紀を中心になされてきた。代表的な例としては、G.S.Rousseau & Roy Porter(eds.), *Exoticism in the Enlightenment* (Manchester U.P.,1990) や Robert P. MacCubbin & Christina Knellwof(eds.), *Exoticism and the Culture of Exploration* (Duke U.P., 2002)などがあるが、これらの研究は、この時代が帝国主義や植民地支配が十分に表面化していなかったために、18世紀こそがエキゾティシズム研究に最適な時代とみなしていた。従って、19世紀は「エキゾティシズムの幻想が最も栄えた」時代と認めつつも、世紀後半にはそれが「完全に陳腐な幻想」に退化したとして、研究の価値を認めようとしなかった。

他方ポストコロニアリズムの立場でのエキゾティシズム研究も盛んだが、十分とはいえない。例えば、Isabel Santaolalla(ed.), *New Exoticisms*(Rodopi,2000) や Graham Huggan, *The Postcolonial Exotic* (Routledge,2001)などの研究では、着想の鋭さは認められるが、残念ながら、歴史的な視野と視点が欠落している。

19世紀から20世紀前半にかけてのエキゾティシズム研究は、帝国主義全盛の時代

ということもあつてか、幻想の多様性や戦略としての可能性があたかも存在しないかのようにみなされ、不十分な状態のままであった。たとえば、20世紀初頭を扱った Gerhard Schepers, “Exoticism in Early Twentieth-Century German Literature on Japan” in Christian W. Spang/Rolf-Harald Wippich (eds.), *Japanese-German Relations, 1895-1945* (Routledge, 2006)は、文学や音楽の事例紹介に留まっていた。また世紀末のエキゾティシズムを扱った Sophie Fuller, *Creative Women and Exoticism at the Last Fin-de-siecle*,2005 や Martin Clayton&Bennett Zon, *Music and Orientalism in the British Empire,1780s-1940s:Portrayal of the East*, (Ashgate,2007)にしても、マイノリティが逃避できる幻想の東洋という、旧来からのオリエンタリズム批判にとどまっていた。

このように、18-20世紀初頭のエキゾティシズム研究はなお研究すべき余地が多々残されていた。

2. 研究の目的

本研究は、18世紀から20世紀前半にかけての近代におけるエキゾティシズムを総合的に研究し、その多様性と可能性を解明することを目的としている。総合的とは、まずエキゾティシズムを単純に西洋から東洋、あるいは東洋から西洋へ、ではなく、西洋と東洋の双方向から捉えることである。そのために、本研究では西洋史（英独仏）、英文学、アメリカ文化史研究、日本史、中国文学、中国文化史、（比較）文化研究など多様な専門分野の研究者を集めた。つぎに、近代のエキゾティシズムを人種、階級、ジェンダーさらには受容と消費の観点から重層的に研究することで、そこに支配や収奪にとどまらない

解放や抵抗など無数の可能性を見出すことである。しかしとりわけ重視したのは、エキゾティシズムがもつ「反転性の潜在力」(Isabel Santaolalla, ed., *New Exoticisms: Changing Patterns in the Construction of Otherness*, Amsterdam, 2000) を具体的に示すことであった。

3. 研究の方法

本研究は、東洋と西洋という認識の枠組み、さらには南と北という観点も参考に、双方向的に考察するという方法をとることで、オリエンタリズムとオクシデンタリズムとの対立に回収されないエキゾティシズムの可能性を、あるいは東西と南北の間で交差し交錯するエキゾティシズムの政治性と越境性を捉えようとするものである。

18世紀から20世紀前半に時期を限定し、この時期のエキゾティシズムの特質と意味を明らかにするのだが、エキゾティシズムの拡大と重層性の過程を東と西という認識枠と、また補助線として南と北という認識枠、双方から縦横に捉えることで、当該期におけるエキゾティックなものへの幻想の多様性や戦略としての可能性を広く探りだすのである。

4. 研究成果

われわれが最も心血を注いだのは、ほとんど必然的に一方的な権力関係のシステムになってしまうサイド的なオリエンタリズムにはない、エキゾティシズムがもつ「反転性の潜在力」を具体的に示すことであったが、今回の科研での研究を通じてある程度このことに成功した。シノワズリーやジャポニスムも、もちろんエキゾティシズムであるが、こうした側面についてほとんど明らかにされてこなかった。ジャポニスムに関して、

浮世絵が印象派に与えた衝撃などが論じられてきただけである。しかし、そもそもジャポニスムやピカソへの影響でよく知られているプリミティヴィズムの西洋への衝撃にしても、そのまえにシノワズリーによる西洋への衝撃が必要であった。ところが、通説的にはシノワズリーの影響は皮相なものとしてきた。アンドレ・グンダー・フランクが『リオリエント——アジア時代のグローバル・エコノミー』において1800年までの世界経済においてアジア、とりわけ中国が中心的地位を占めていたことを強調したのに呼応して、近年文化史的にも中国が従来考えられていたよりも強い影響力を持っていたことが強調されるようになった。われわれはこうした説を検討し、Hugh Honourが*Chinoiserie: The Vision of Cathay*, 1961で述べた説、すなわち「ジャポネズリーはエキゾティシズムへの新しい需要に応え、瀕死のアカデミズムの伝統の中にあつた古典主義からの歓迎すべき救済者を提供した。その歴史はより長く複雑なシノワズリーの歴史をミニチュアサイズで反映している。だが両者はある重要な点で異なっていた。17、18世紀の画家や職人は彼らのパトロンの命令で中国の芸術についての彼ら自身の高度に個人的な解釈を生み出していたが、19世紀の画家は彼ら自身が発見したオリエンタルのモデルにより控えめで受動的な精神態度でアプローチした。彼らは日本の芸術が基づいている本質的原理を理解し、マスターしようとした。かくして日本は中国よりもはるかに深く、重要な影響をヨーロッパの様々な芸術に与えた」とする説は妥当性を欠くものであり、ジャポニスムとプリミティヴィズムに先立ってシノワズリーが西洋世界により根本的な影響を与え、いわばジャポニスムやプリミティヴィズムが影響を与えるための地ならし

をしていたことを明らかにした。また、ガランの翻訳から始まる『アラビアンナイト』の西洋への影響についても、西洋の人々がただ『アラビアンナイト』の世界に酔いしれていたというだけではなく、そのことによっていっつしか深い影響を受けていた可能性があることを、たとえばディケンズやシャーロット・ブロンテの作品世界に見られることを明らかにし、エキゾティシズムがもつ「反転性の潜在力」の一端を示し得た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 20 件)

- ① 東田雅博、文化史のリオリエント、『金沢大学 歴史言語文化学系論集 史学・考古学編』、査読無し、第 5 号、2013, 163-182
- ② 東田雅博、近代イギリスの中国イメージ再考 柳模様と Britain's Chinese Eye、『金沢大学 歴史言語文化学系論集 史学・考古学編』、査読無し、第 4 号、2012, 243-257
- ③ 宇沢美子、フォークナーの『操り人形』についてーピエロと影と中国の欠片考、『フォークナー』(日本フィリアム・フォークナー協会)、査読無し、第 14 号、2012, 37-53
- ④ 武田雅哉、龍梅と玉栄の姉妹が読まれたものー『草原英雄小妹妹』連環画の諸相、『連環画研究』、査読無し、第 1 号、2012, 68-82
- ⑤ 竹中亨、Das Geschichtsbild des modernen Deutschland in der japanischen Historiographie, *Korean Journal of German Studies*, 査読無し、19 巻、2010, 181-195
- ⑥ 竹中亨、Isawa Shuji's National Music: National Sentiment and Cultural Westernisation in Meiji Japan, *Itinerario*, 査読有り、34-1 2010, 97-118

[学会発表] (計 5 件)

- ① 竹中亨、Listening to Music Through the Head: A Pattern of Western Music Reception in Modern Japan、マックス・プランク教育研究所国際会議、2013 年 1 月 24 日、フリーメイソン・ベルリン州本部会議場、ドイツ
- ② 竹中亨、Japanese Ideas of World History、ハイデルベルク大学アジア・欧州研究センター講演、2011 年 11 月 17 日、ハイデルベルク、ハイデルベルク大学、ドイツ
- ③ 宇沢美子、マリオネット劇場についてーフォークナーとピエロとその影と中国のかけら考、日本ウィリアム・フォークナー協会第 14 回全国大会シンポジウム、2011 年 10 月 7 日、関西学院大学、大阪府

[図書] (計 7 件)

- ① 立川健治、世織書房、『地方競馬の戦後史』、2012 年、702 頁
- ② 杉本淑彦・小山哲・上垣豊・山田史郎、共編著、ミネルヴァ書房、『大学で学ぶ西洋史 [近現代]』、2012 年、268~271 頁、336~346 頁
- ③ 武田雅哉、講談社、『万里の長城は月から見えるの?』、2011 年、256 頁
- ④ 橋本順光、大阪大学出版会、森岡裕一 編『西洋文学: 理解と鑑賞』、2011 年、43-55 頁、149-163 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

東田 雅博 (TOHDA MASAHIRO)
金沢大学・歴史言語文化学系・教授
研究者番号: 50155496

(2) 研究分担者

宇沢 美子 (UZAWA YOSHIKO)
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号: 00164533

橋本 順光 (HASHIMOTO YORIMITU)
大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：80334613

武田 雅哉 (TAKEDA MASAYA)
北海道大学・文学研究科・教授
研究者番号：40216908

齋藤 大紀 (SAITOU HIROKI)
富山大学・人文学部・准教授
研究者番号：70361938

立川 健治 (TATUKAWA KENJI)
富山大学・人文学部・教授
研究者番号：20227086

竹中 亨 (TAKENAKA TOORU)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：90163427

杉本 淑彦 (SUGIMOTO YOSHIHIKO)
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号：30179163

(3) 連携研究者
なし